

近世～現代における接尾辞「～やすい」「～にくい」「～づらい」の意味・用法の変化 —プラス評価，マイナス評価の観点から—

石橋裕子

「～やすい」「～にくい」「～づらい」が表す事態には話し手(書き手)による評価が存在し、話し手の立場によりプラス評価，マイナス評価の両方がされうる(森田良行(1977)『基礎日本語 使い方と意味』(角川小辞典))。これらの接尾辞は、中世以前はマイナス評価の用例がほとんどであったが、「～やすい」は江戸時代から、「～にくい」は室町時代から、「～づらい」は現代に入ってから、プラス評価の用例が見られるようになったとされている(近藤明・天谷友美(2010)「「～ヤスシ/ヤスイ」の語史への一視点」、近藤(2013)「形容詞性難易表現の指摘変遷をめぐって」(『金沢大学人間社会学域学校教育教育学類紀要』02, 05 金沢大学人間社会学域学校教育学類))。

本発表では国立国語研究所の日本語歴史コーパスと現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて近世・近代・現代における「～やすい」「～にくい」「～づらい」の用法の比較を、プラス・マイナスの評価の観点から分析し、その割合を調べた。分析した用例数は「～やすい」945例、「～にくい」764例、「～づらい」313例である。分析では、前後の文脈および前接する動詞から、話し手(書き手)の立場から見たプラス評価，マイナス評価，中立の3つに分類した。その結果、「～やすい」「～にくい」は時代とともにプラス評価の用例が増加していることがわかった。「～やすい」は、近世・近代では20%程度だったプラス評価が2000年代には70%近くを占めるようになってきている。「～にくい」は、近代からプラス評価・中立的評価について述べる例が散見されるようになり、現代にかけて徐々に増加している。「～づらい」についても、少数ではあるが80年代から現代にかけて継続的にプラス評価もしくは中立的評価の用例が見られた。以上のように、本稿ではコーパスを用いて「～やすい」「～にくい」「～づらい」の評価的意味の変遷を実証的・計量的に示すことができた。